文化財をたずねて

No. 27

発行　赤穂市教育委員会
編集　生涯学習課文化財係
（赤穂市加里屋 81　TEL 43-6962）

赤穂の中世城館を攻める！①

赤穂市の城といえば江戸時代の「赤穂城」を思い浮かべるが、市内には江戸時代以前の中世（今から約 800 ～ 400 年前・鎌倉時代～安土桃山時代）に築かれた城館（じょうかん）も多く存在していた。

赤穂市の属する千種川流域は、播磨国と備前国・美作国の国境であり、畿内と中国地方の境界の守りとして多くの山城や城館が築かれた。また播磨では赤松氏が活躍したこともあり、赤松氏が築城したとされる城館が多い。市内では位置が明らかになっているものだけでも 12 か所の山城や城館を確認することができる。

江戸時代に築かれた城の多くは、水堀・石垣・土塀・瓦葺建物といった厳重な施設を備えているのに対して、中世の城は素掘（すぼり）の溝・木柵（もくさく）・板葺（いたぶき）建物といった簡単な施設からなっていた。しかし、城の多くは急峻（きゅうしゅん）な山の尾根や山頂を利用して築かれ、自然地形を最大限に利用して防御力を高めていた。

このように中世城館は自然の山を切り盛りして造られた、いわゆる「土の城」であり、建物や柵などの構造物が残らなくとも、堀や郭（くるわ）（曲輪）の痕跡はよく残っている場合が多い。市内に残された多くの中世城館から、戦乱の時代である中世の赤穂のようすを垣間みることができる。

※本紙に掲載した山城跡の見取図は、既往の縄張図を元に現地踏査を行い作成したものです。
　平坦面の配置や位置を模式的に表現したもので、いわゆる「縄張図」とは異なります。

①蟻無山（ありなしやま）山頂付近【有年原（うねはら）】

有年原地区にある標高 71 m の蟻無山は、古墳時代中期の帆立貝形古墳「蟻無山 1 号墳」が山頂に存在することで著名である。この古墳の周囲に平坦面や堀切（ほりきり）状の地形がみられ、山城状の地形になっている。

北からみた蟻無山

古墳上では中世の遺物が採集されているほか、周囲の尾根にある堀切状の地形は「玉堀峠（たまほりとうげ）」と呼ばれている。また、周辺には「小丸（こまる）」「小鷹（こたか）」といった地名が残るほか、蟻無山に城を築いた昔話も伝えられている。そのため、江戸時代の文献に登場する「小鷹の城」が蟻無山に存在したとする説もあり、古墳が後世に山城として利用されていた可能性がある。

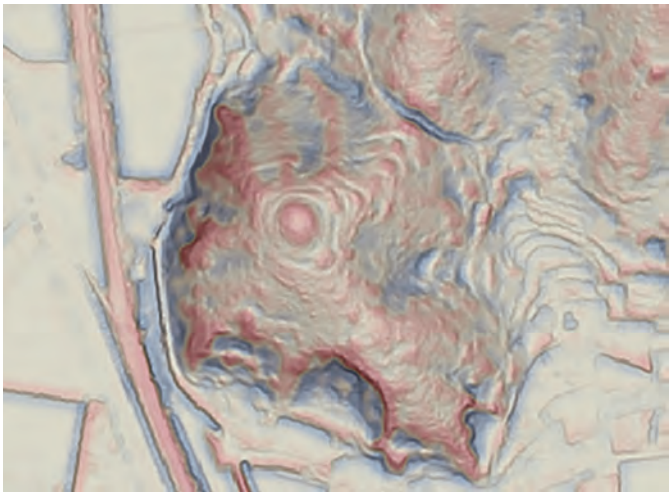
『赤松家播備作城記』『播州赤穂郡志』によると小鷹城の城主は小田弾正（だんじょう）（太田弾正とも）の子である小田治内とされる。小鷹城は天正 5（1577）年もしくは元亀 2（1571）年に同じく赤松氏の家臣であるが不仲であった小河丹後守秀春に攻められたが、東有年の住民の加勢により小鷹城は落城しなかったという。ちなみにこの小鷹城は有年横尾地区にある鵜ケ堂（つきがどう）城に比定する説もある。

蟻無山付近　見取図

蟻無山山頂

玉堀峠

周辺の平坦地



蟻無山周辺の CS 立体図

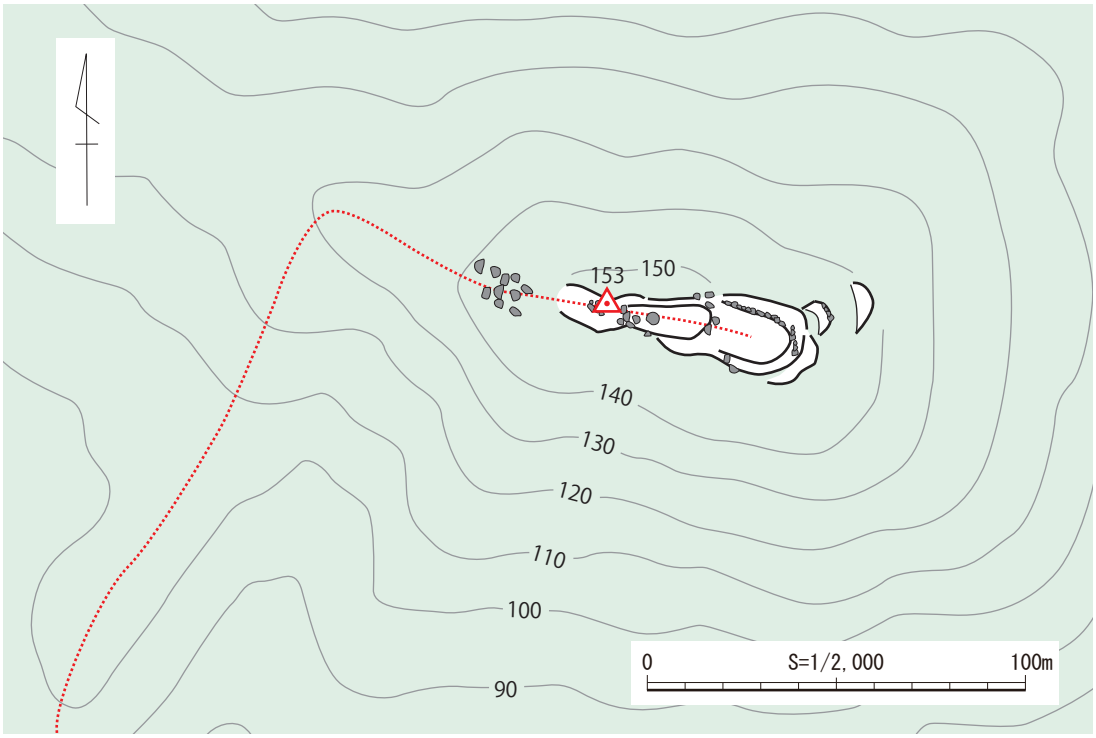
②後藤陣山城【有年楢原】

有年楢原地区にある標高約 150 mの小さな尾根の頂上一帯が、古くから「後藤陣」と呼ばれている。

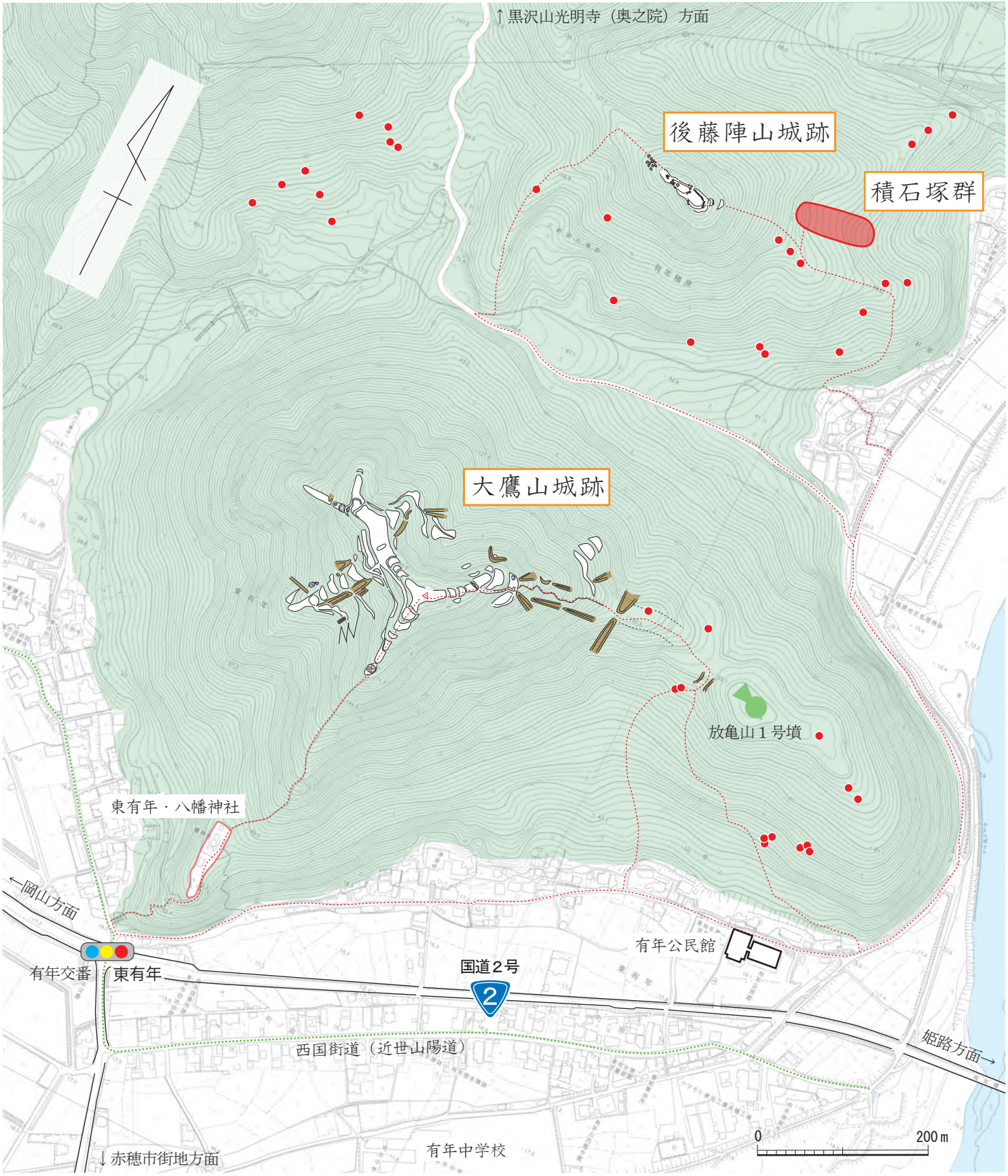
地元の伝承や『赤穂郡誌』によれば後藤氏が陣を構えた山城の跡とされているが、後藤氏がいかなる人物で、いつ頃に城を築いたのかなど、詳しいことについては伝わっていない。赤松氏の家臣であった後藤氏、もしくは毛利方の美作国衆の後藤氏のことであるとも考察されているが、詳しいことはわかっていない。

現地では小規模な平坦地が確認できるだけだが、一部に石垣状の石積みなども確認できる。

東からみた後藤陣山城跡



後藤陣山城跡　見取図



大鷹山城跡・後藤陣山城跡　周辺地図

※赤い点は古墳

非常に小規模であることや、堀切などの防御施設が極端に少ないことから、単独の城ではなく、南に隣接する大鷹山城に付随する砦、戦時に本陣がおかれたとされる北西に隣接する黒沢山光明寺の前衛の陣ではないかと考えられている。また城跡の東の山麓には、中世の墓と思われる石を積み上げた塚がある。この塚の下には火葬された人骨が納められているが、こうした形式の墓は赤穂市内ではこの場所にしかなく、周辺の合戦での戦死者を弔ったものとも考えられる。

石垣状の石積み

東山麓の積石塚群

③大鷹山城（八幡山城・有年山城）【東有年・有年楢原】

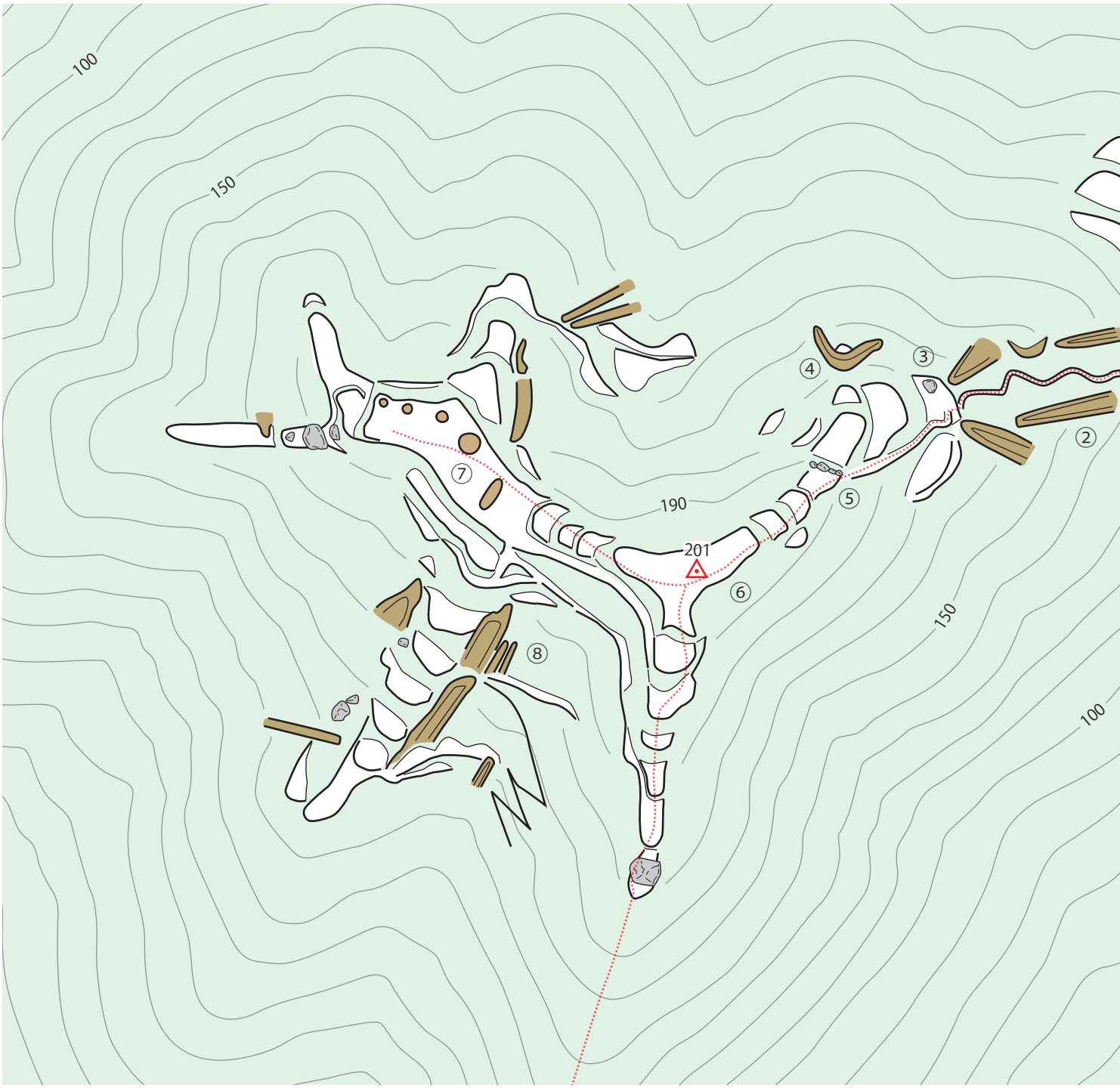
東有年・有年楢原地区に位置する標高 201 mの大鷹山（八幡山とも）の山頂にある市内最大の山城。地元では古くから古城跡と伝えられており、「城山」や「八幡山の城」と呼ばれ、山頂部分は「城台」と呼ばれている。

『赤松家播備作城記』『播磨鑑』などの江戸時代の文献によれば、初代の城主は赤松範資の子、本郷掃部助直頼であったとされ、暦応年間（1338 ～ 1342 年）に居城していたという。その後、赤松氏の家臣であった富田右京（戸田右京とも）が再び山城を築いたが、天文年間（1532 ～ 1555 年）頃に浦上宗景に攻め滅ぼされたとされる。また赤松氏の家臣であった小田弾正（太田弾正とも）が城を再び築き、元亀年間（1570 ～ 1573 年）に居城したともされており、たびたびその城主が変わっている。

ただし、これらは後世の伝承であるうえ、周辺の他の山城の記録や伝承が混在しており、詳しいことはよくわかっていない。確実な史料をみると、天正３（1575）年に宇喜多家が赤穂郡に侵攻した後には、宇喜多方の城となったことがわかっている。天正５～７（1577 ～ 1579）年には、織田信長の命を受けて中国地方へ侵攻する羽柴秀吉の軍勢と、毛利・宇喜多家の軍勢の間の戦闘があり、史料には「八幡山」の城として登場する。

天正７（1579）年には宇喜多直家が織田家へ帰順するが、それ以降の史料には現れないことから、そのまま廃城されたものと考えられている。

南からみた大鷹山城跡



大鷹山城跡　見取図

①土橋１

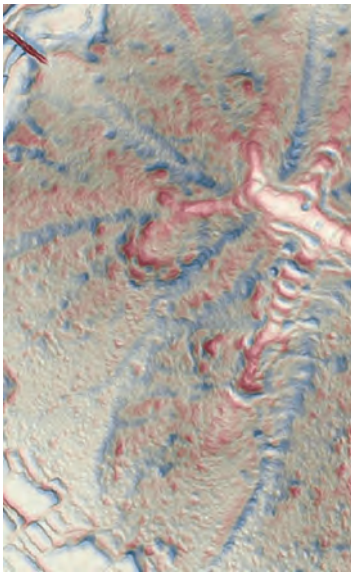
東の山塊「放亀山」から大鷹山へ繋がる尾根上にある最も東側に位置する遺構。

尾根上の平坦面の両側を深く切り込んで道幅を狭め、橋のようにしている。城への進入路を狭めることで、敵への迎撃を容易にしている。

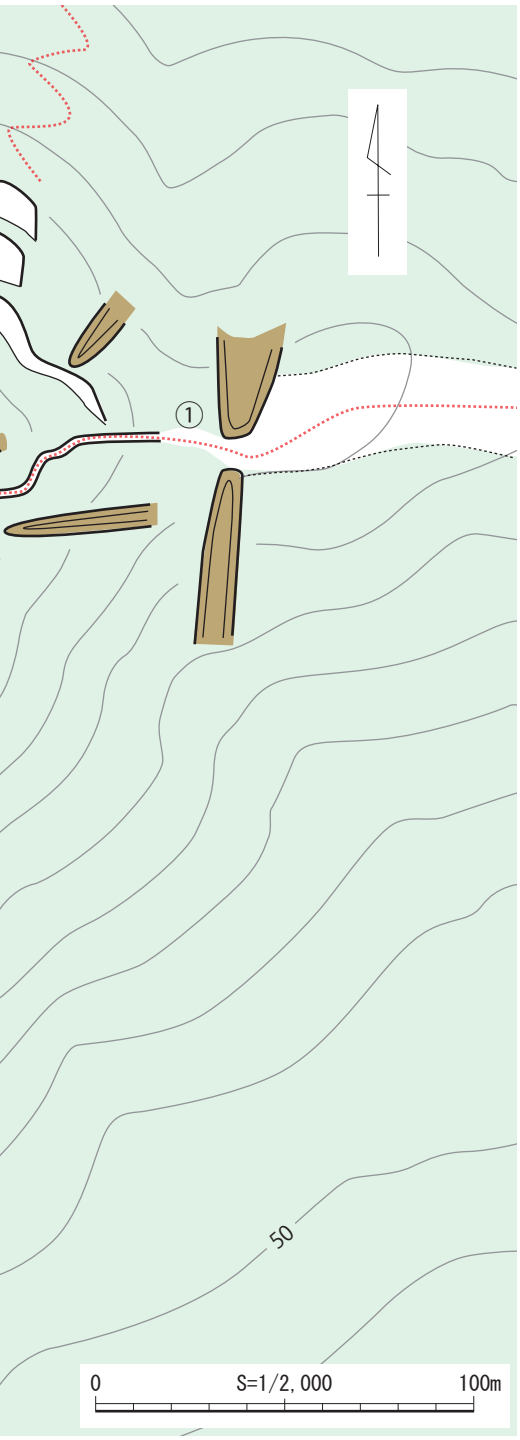
②登城道と竪堀

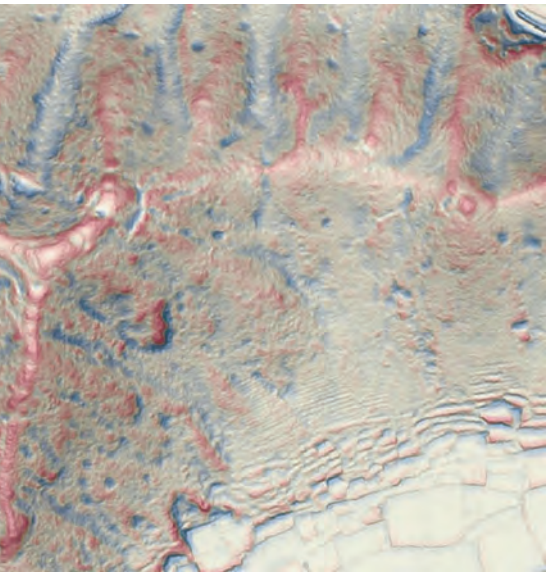
土橋１を抜けると、山頂へと向かう急斜面が現れる。

斜面には九十九折（つづらおり）になる溝状の登城道があり、その両脇に浅い竪堀や土塁のようにみえる盛り上がり、溝が連続している。



大鷹





山城周辺の CS 立体図

③土橋２

東側に再び斜面を切り崩し、土橋が造られている。大鷹山城の土橋はすべて東側に造られていることから、東側の防備が入念な構造になっているといえ、東側の登城道が城への主要な進入路であったと考えられる。

④堀切

北側にゆるやかに伸びる尾根と大鷹山城を切り離すように、岩盤を崩して深い堀が掘り込まれている。

南側は、岩盤がほぼ垂直に削り取られており、崖のようになっている。北から南へ向かう敵の進入を阻む工夫である。

⑤石積み

わずかだが石垣状に積まれた石積みがみられる。平坦面を全周するものではなく、東側のみに自然の岩盤を一部利用しながら築かれている。

また付近には人為的に石が組まれたようにみえる穴があり、これが井戸であるとする説もある。

⑥主郭

最も防御が厚く、城の中心と考えられる平坦面は「主郭」と呼ばれる。大鷹山城では城跡の最高所に造成されており、広大な平坦地になっている。周囲は斜面を切り崩して急斜面に加工された「切岸（きりぎし）」が明瞭に確認できる。

三角点があるほか、南方に遠く瀬戸内海を望むことができる。

⑦溝と穴

主郭の西にも広大な郭があり、そこには溝や穴が掘られている。穴は３か所あり、最大のものは直径５ｍ、深さ２ｍの巨大なもの。ため池や貯蔵庫（穴蔵）に使用されたとする説が有力であるが、用途はわかっていない。

溝は堀切や建物に関連するものと考えられる。

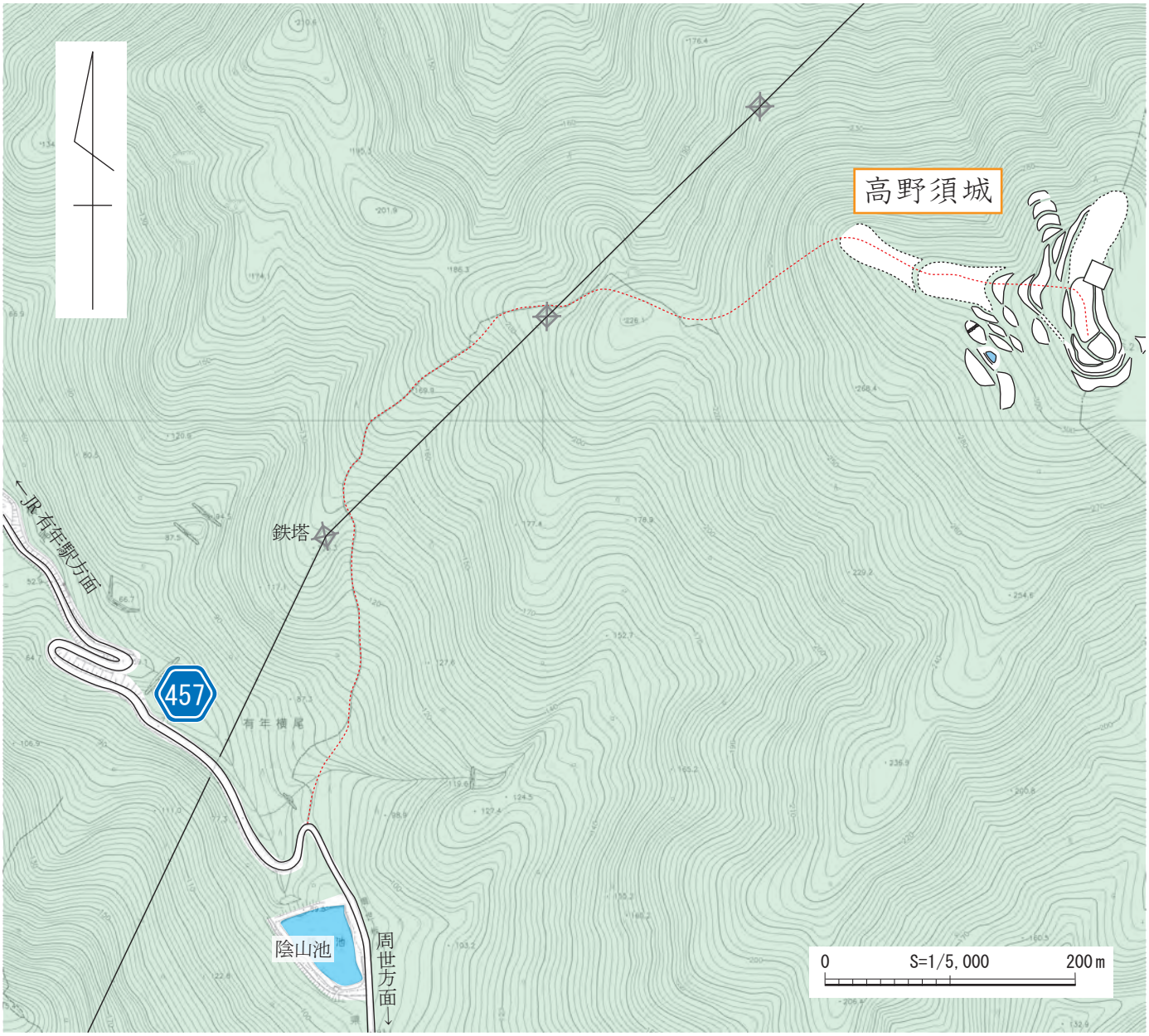
④高野須城【有年横尾・有年牟礼】

有年横尾地区と相生市若狭野町雨内にまたがる標高 316 mの荒山（祇園山とも）の山頂は、赤穂市と相生市の市境になっている。この荒山山頂が高野須城であるとされている。江戸時代には山頂に海神社（龍神社）が祀られ、雨乞神事が行われていたという。

『岡城記』では「高野須山構　高島右馬介正義」とあり、城とは区別されて記載されていることから、簡易な砦のような施設であったと考えられる。15 世紀には存在した可能性があるが、詳細はわかっていない。

東からみた高野須城跡

『播磨鑑』では城主は高島（赤松）右馬助正澄とされる。羽柴秀吉が上月城（佐用町）を攻めたとき、甥の上月城主赤松政範とともに高島正澄も上月城に籠り、戦死したとされる。その後、高野須城も廃

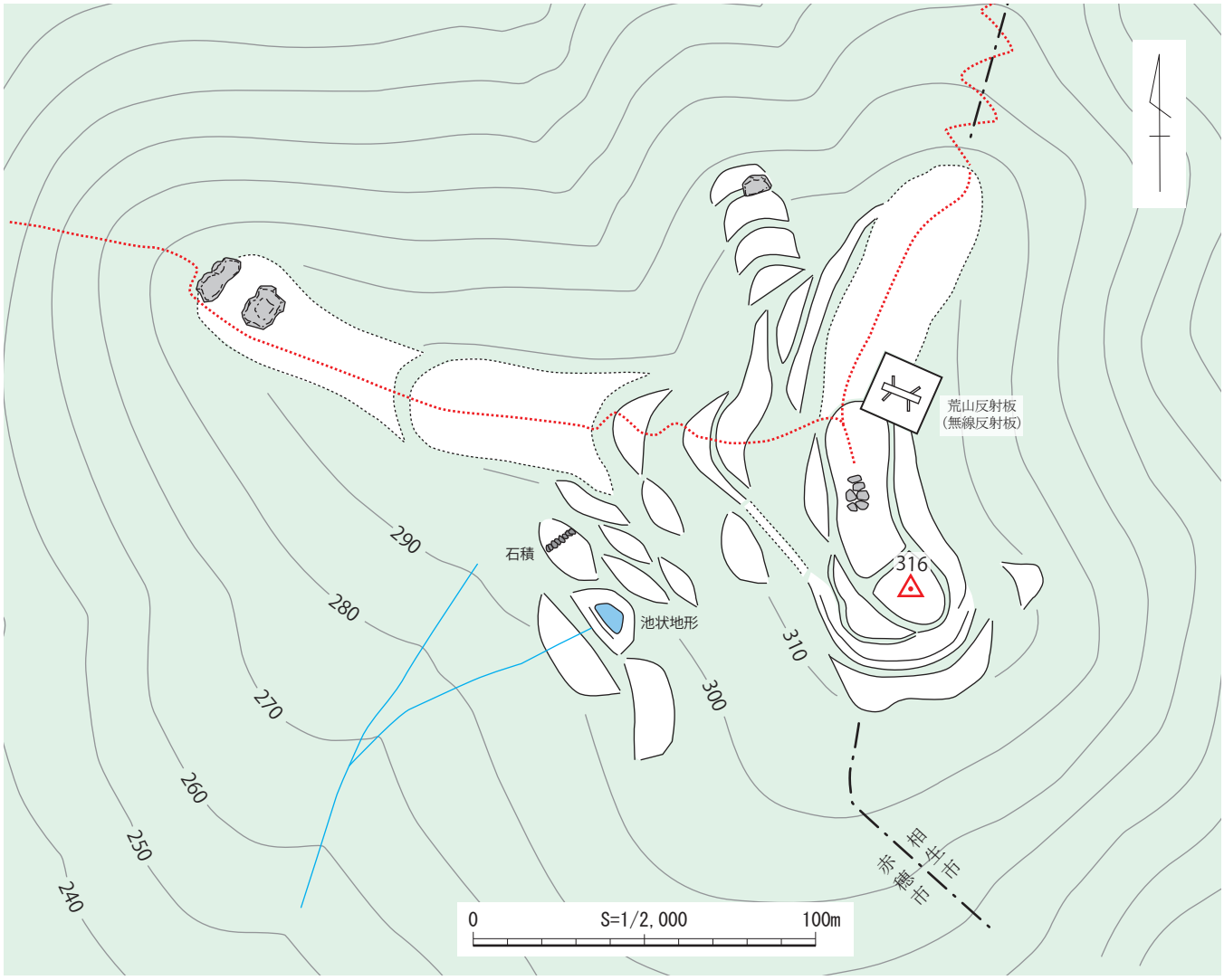


高野須城跡　周辺地図

城となったという。

現地では堀切や竪堀、石垣などはみられず、また平坦面も後世の改変が激しく、山城であった痕跡はほとんど残されていない。ただし、北西斜面に平坦面が連続していること、山頂付近で中世の土師器皿が比較的まとまって採集されていることから、山城として利用されていた可能性は非常に高いものと考えられる。

南西側にも連続して平坦面がみられ、石積みが残されている。また、池状の窪みがある平坦面も確認できる。周辺には「馬洗場」とよばれる場所があり、城の名残りといわれている。



高野須城跡　見取図

連続する平坦面

城跡からのながめ

⑤富原（とんばら）城推定地【中山】

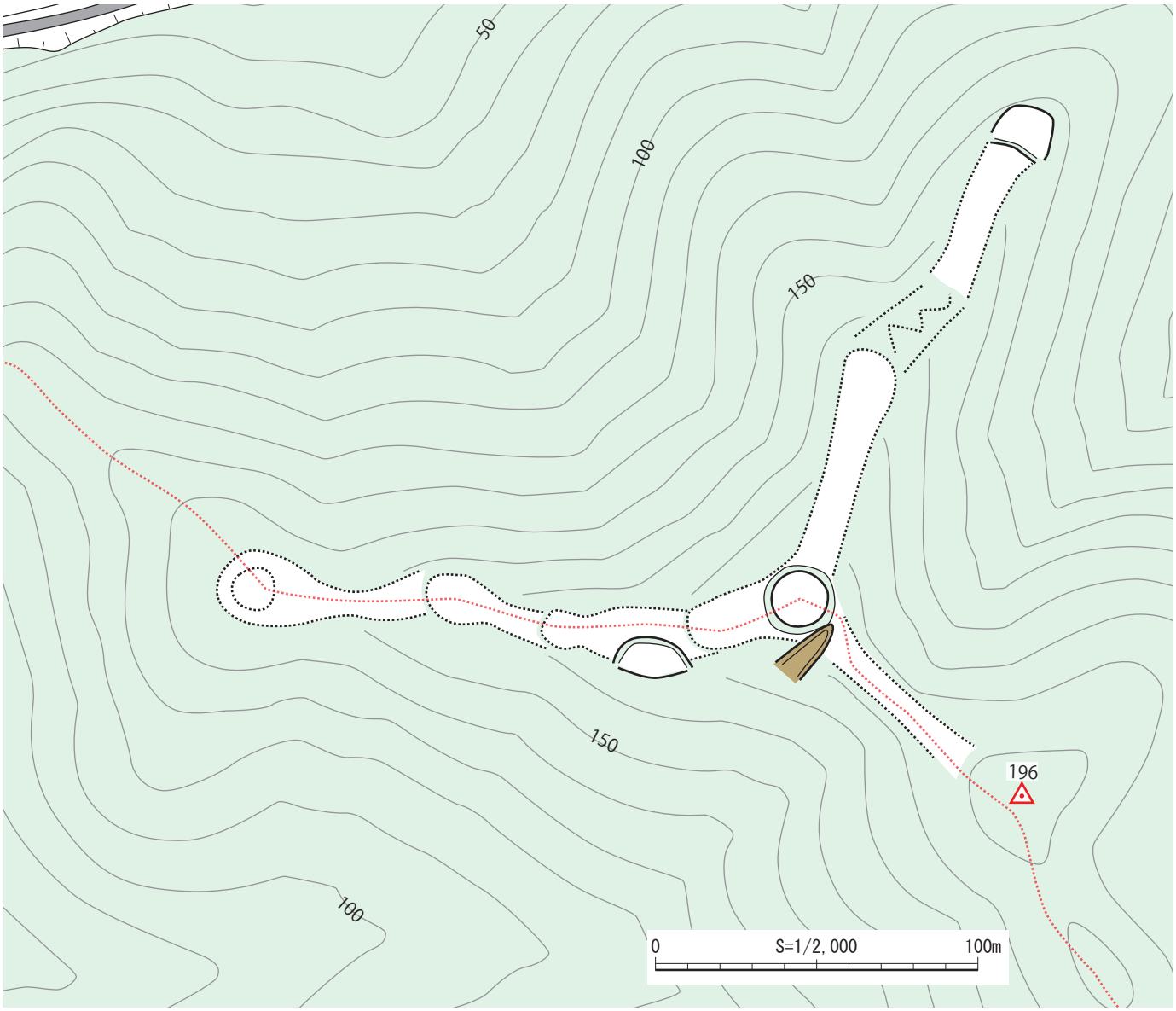
中山地区富原集落の東側にある標高約190ｍの尾根上に、山城状の地形がある。

尾根状の平坦面を掘削して堀切状にしているほか、頂上が人工的に削られて平坦になっている。また数か所だが平坦面が確認できる。ただし、ほぼ自然地形に近い状態で、かなり小規模なものである。そのため、周辺の山城に付随する陣や見張台のような施設であったと考えられる。

北からみた富原城跡推定地

この城跡に関する文献や記録は乏しいが、江戸時代の文献に「富原城」として登場するとされる。城主は富原左衛門尉（さえもんのじょう）なる人物であったとされるが、詳しいことはわかっていない。あるいは『播磨鑑』に記載される「中山城」である可能性もある。

富原城跡推定地　周辺地図



富原城跡推定地　見取図

堀切状の地形

山頂にある平坦面

①:蟻無山【有年原】
②:後藤陣山城【有年楢原】
③:大鷹山城(八幡山・有年山城)【東有年・有年楢原】
④:高野須城【有年横尾・有年牟礼】
⑤:富原城推定地【中山】
⑥:鍋子城【中山】
⑦:鵜ケ堂城【有年横尾】
⑧:尼子山城【高野】
⑨:茶臼山城【坂越】
⑩:坂越浦城【坂越】
⑪:高山(今荒神の砦跡)【塩屋】
⑫:加里屋古城【加里屋】

赤穂市内の中世城館跡（位置の判明・推定できるもの）

※⑥～⑫は次号掲載予定です。

（本紙に掲載したCS立体図は、兵庫県が「G空間情報センター」を通じて公開した画像を使用しています。）